

自分の考えを書き、伝え合うことで考えを深めるための指導法の工夫

見附市立新潟小学校

田代勝巳

1 研修主題との関わり

自分の考えを書き、伝え合うことで考えを深めるための指導法の工夫

当校では、言語活動を充実させるために、「書く」「伝え合う」活動を授業の基盤に据えて、「書くことによって考え、伝え合うことによって考えを深める授業づくり」に取り組んできた。

まず課題に対して、自分の考えを書き、その書いたことをもとに互いの考えを伝え合い、さらに伝え合ったことをもとに、再度自分の考えを書く。そのために次の点を考えながら、研究を進めた。

- (1) 考えを伝え合うためにはどのような課題が適しているか。
- (2) 伝え合う時に、どのような手立てをとると活発に意見を言えるのか。
- (3) 最後に書かせるときに、どのような手立てが必要か。

2 実践の概要（5年生）

国語 情景を想像して読もう 教材文 「雪」（三好達治）

(1) めざす子どもの姿

- 根拠を明確にして、理由を加えながら自分の考えを書く。
- 具体例を挙げたり、仮定したりして意見を言う。
- 内容を区別（異同、賛成・反対・質問）しながら伝え合う。
- 友人の考えを生かしながら、学習のまとめを書く。

(2) 具体的な手立て（指導法の工夫）

①課題提示

中心課題は、必ず板書し、ノートに写させる。

ノートに写したら、分かりやすいように赤で囲ませる。

課題は、二者択一的な課題か多様な考えが生じる課題を用意する。また、その課題を考えることで情景を考えることができるような課題を用意する。

②自分の考えを書く

課題に対する自分の考えとその理由をノートに書かせる。

考えが書けたら教師が確認し、その考え方を認め、どこがいいのかを端的にほめる。また理由はできるだけ長く、いろいろな観点から書かせる。そのために、長く書けている児童や、多様な観点から書けている児童をほめる。さらに、他の意見への反論も書かせるようにし、書けている子をほめるようにする。

③伝え合う

最初にどの考えを支持するのか人数を聞き、板書する。少数派の理由から発表させ、理由の発表が終わったら討論に入る。

討論が活発になるように、できるだけ児童同士だけで討論をさせていく。

論点がずれたり、発言の順序が違ったりした時には、教師が論点を整理したり、誰が言う番なのかを指導したりする。

発言に偏りが出ている場合は、途中で討論を止めて、発言していない児童の話す時間を確保する。また、意見がなかなか出ずに膠着状態になった場合は、隣同士や小グループで相談する時間をとる。

討論が終えたら、どの発言がよかったのか教師が意味づけ、価値付けをしてほめる。

④自分の考えを書く

授業の終盤で、再度、同じ課題に対しての自分の考えを書かせる。その時には、他の児童の名前や考えを入れて書かせるようにする。自分の考えを整理させるために、書く時間を十分確保する。

(3) 授業の実際

①ねらい

- ・詩の言葉を根拠にしなが、どんな情景を表しているのか考えることができる。
- ・自分の考えを互いに伝え合うことで、情景を読み取ることができる。

②展開の視点

まず詩の音読から始める。児童に数回読ませ、確認のために数名に指名して読ませる。

その後、教師が範読し、詩の情景を想像させる。そして想像したものを発表させる。この段階では、児童が自由に想像したものを全て認め、発表させていく。

発表後、詩の情景を全体で確認していく。確認するポイントは、「いつ、どこで、だれが、どのように」である。昼か夜か、都会か田舎か、二人の関係、雪は降っているか止んでいるかなどを確認していく。なお、二人の関係については、ここでは検討せずに考えだけ出させることにする。

中心課題は、「家の数は何軒あるのか」である。まず、自分の考えを書かせ、教師のところへ持ってこさせる。どの考えも認め、理由を端的にほめる。全員が考えを書いたら、人数を確認し、討論を始める。討論することで、どの情景がもっとも適しているのかを考えさせていきたい。

最後に、自分の考えを再度書かせることで、伝え合うことでどれだけ考えが深まったのかを見取ることとする。

(参考文献 『授業の腕をみがく』 向山洋一・明治図書)

(4) 児童のノート

雪 三好達治

太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪降りつむ。
次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪降りつむ。

今日は「雪」という詩について学習した。まず、太郎と次郎の関係について話し合った。私は、兄弟ではなく「それ以外」だと考えた。理由は兄弟と一緒に住んでいたら、わざわざ二つの文にしなくてもいいと思ったからだ。

次に家は何軒あるかについて話し合った。私は二軒以上あると考えた。理由は、太郎、次郎と続いたら、もっとその先にもあると思ったからだ。

宙さんと瑠亜さんが「太郎と次郎は例だと思います」と言ったが、私もその意見に賛成だ。

3 成果と課題

考えを伝え合うためには、次のような課題が有効であった。

- ・二者択一の課題
- ・考えがいくつかにしぼられる課題

国語であれば、根拠をもとにどのように理由付け、解釈するかで考えが分かれる課題が、互いの考えを伝え合うのに適している。

また、次のような手立てをとると活発に意見を言えるようになった。

- ・どの子の考えも認めほめること
- ・人と違った意見の価値を意味づけしてほめること
- ・論点がずれたり、言う順番がちがったりした時には教師が修正すること

さらに、最後に書かせる時には、友達の名前や考えを引用しながら書くように指導した。そのことで、子どもが誰の考えによって自分の考えが変化したのかを自覚し、教師が子どもの考えがどう深まったのかを見取ることができるからである。

しかし、子どもがどのぐらいの量をどの程度書けるようになるのが望ましいのか、その姿が曖昧なままであった。今後、児童の実際の文章をもとに、どれだけの量をどの程度まで書けることが望ましいのか、その具体的な姿をさらに検討していく必要がある。